

人を自由にする道具5

桐山岳大さん

人は、本来はとても純粹で柔らかい存在ではないでしょうか。それがなぜか、かたくなで複雑で固い絡まったものになりがちです。

そこには、どういふはたらきがあるのでしょうか、誰がそうさせるのでしょうか？

産まれおちてくる時には、又の役に「この母親にうまれたい」というふわつとした意図をもつて母親のおなかに宿つてくるとします。それがどこかで問題が起ると誰かのせいにし、自分が被害者になつてしまつたりする。考えてみると純粹な願いがねじれてしまうのは不思議なことだともいけません。

たとえば私は、長男の長男として産まれたので、とてもかわいがられたようです、自分では覚えていなかったので、幼児だつた時の写真をみて、驚いたのです。写真の中では、叔父に抱かれ、祖母は微笑み私を歓迎するように笑つて居るのです。それをみると、自分が歓迎されて産まれてきたことがわかります。

何がこういふ喜びをわすれさせてしまうのでしょうか。

記憶をたぐると、節目は妹が産まれてきたときでした。そこで世界は変質してしまつたのです、勘違いをし、大人は教える言葉をもたなかつたのでした。

証拠となる写真があります。母親の腕にだかれる赤子の妹を、横にたちながらすねたように横目でみて居る自分の写真です。この時の3歳の自分は、妹に母親をとられたと勘違いし、自分はもういないのだと思つたにちがありません。いたずらをすれば、「おまえはもわられてきた、橋の下で産まれた子だ」等の話をきかされ、それを信じてしまう、悪循環にはまり、その勘違いは強化されたのでした。

それ以来、孤立した人生が始まつたのです。

今、私が3歳の私の親であつたなら、こう言うでしょう、私に。

妹がうまれてくるよ。おにいちちゃんもつしよにおむかえしようね。

おにいちちゃんが大切であるように、妹も大切なのだよ。

お父さんとお母さんは愛しい、おにいちちゃんがうまれように、妹がうまれる。

ひとりひとりとても大切。私たちは家族なのだから」と。

私は、こうやつて私の欠落から学び、欠落こそが自分を劈

ひらいていく。

慈悲がおりてきて、自分という空の器をみたしていく。

つづく



る。だから親兄弟や友人など、近しい人が実は観音様かもしれない。それどころか観音様は、人間になりきるため、自分が観世音菩薩であるという記憶すら放棄しておられるのだから、もしかしてこの私が観音様かもしれない。だから私も、私の前にいるあなたも、観音様。

私はこれはなかなか素敵な考え方だと思えました。なぜなら私が凡夫だから。凡夫の自覚を持つことと、自他をかけたえのない尊いものと敬うことは両立が難しいんです。人間なんて所詮は愚かな凡夫だと思つたら、尊敬もしにくいんです。でも、世間で塵芥の如く扱われている人も、蛇蝎のごとく嫌われている人も皆、観音様だと考えたら。例えば私の大嫌いなあの新興宗教の教団も、宗教とは何かということを、私に考えさせるため、観音様が化身しておられるのだ、と考えたら。何だかみんなありがたいような気がしてきます。いなくていい人なんていやしない。だってみんな、観音様なのだから。

愚かな凡夫のまままで充分尊いんだ、仏の願いがかげられている身なんだ、という風にはなかなか信じられないほど、私は愚かです。観音様だと思わなければ人を尊敬できないほど、私は愚かな凡夫なのです。でも、そこまで凡夫になりきれほど、私という仮の姿をとつた観世音菩薩の智慧は、測り知れないんだ……と考えると、何となく嬉しくなるんです。

三本の線が邪魔をして、「仏」にはなれない「私」だ、と考える一方で、「私」は尊い菩薩なのだ、と考えてみる。それが、自分の出遇う苦に立ち向かう勇氣を与えてくれそうに感じられるなら、それも悪くない、と思う私なのです。老いて壊れて認知症の進んだ母が、時々仏様にちかいうように見える時なんか、特にそう思いますね。